令和3年度　丸内中学校　学校だより　NO.7

恕の心

令和3年10月5日　校　長　廣瀬　真樹

再スタートを切る！

　この言葉は昨年の2学期スタート,「恕の心」に出しました。「10月に入ったし何をいまさら」という人もいるかもしれません。「だいたい学校は学期で区切られているんだし・・」という人もいるでしょう。ただ、10月は学級の役員、係や生徒会の区切りでもあります。また文化祭の活動も始まってきます。全国の2学期制の学校は10月から後期が始まります。・・・・まあこれは心の持ちようという事です。つまり

誰にでも「再スタート」の機会が与えられている

ということです。

「ここまで2学期に入って順調だしいい感じだから継続していこう」という人も「ここからもう一回新たな気持ちで頑張ろう」という人も、決心できるかどうかは個人個人の気持ち次第だし、どんなタイミングでもいいと思います。この10月、このタイミングをその機会にするのもいいのではないでしょうか。

　今週末は中間テストがあります。いつも取組に反省や後悔のある人、テストが終わってから提出物に追われる人がいます。
「僕は目標は決めてもなかなかつづかないだよね・・」とか「自分は意志が弱いから無理・・・」という人はいませんか。言い訳ばかり上手になっている人はいませんか。決心した日がスタートの日です。

　2学期の終わりにはその目標に向けて頑張った自分をほめられるようにしてほしいです。2学期に学校に登校するのはあと57日間です。たった一度の中学校生活、ぜひ充実した2学期を送ってください。先生たちはそんな気持ちの人のサポートを惜しみません！頑張りましょう。

受け取らない修行

お釈迦さまと弟子たちが*托鉢して歩いているときのこと、ある町民が文句を言ってきました。「おまえたちは托鉢と言いながら、人に物をもらって生きているではないか。俺たちはこうして額に汗して働いているのに」と、お釈迦さまは延々と続く文句を黙って聞いていました。やがて町民が言い疲れて黙ると、お釈迦さまは、やおら口を開きました。

「言いたいのはそれだけですか？」「そうだ」・・・**「じゃ、さようなら」**

そんなやりとりで、一行はその場を立ち去りました。

しかし、弟子たちは納得がいきません。「お釈迦さま、どうして黙っていたのですか」と聞きます。お釈迦さまはこう言いました。

「おまえたちは、誰かが毒蛇を持ってきたら受け取るのか」

「まさか、受け取るわけがありません」

「受け取らなければ、その毒蛇は誰のものになる？」

「持ってきた人がそのまま持ち帰るしかないでしょう」

「そうだろう。だから先ほど私は悪口という毒蛇を受け取らなかったのだ。悪口という汚れた心は、あの人が持って帰ったのだよ」

『名僧の一言』中野東禅著／知的生き方文庫

＊托鉢：修行僧が鉢をもって生活に必要な最低限の食物を乞う修行

「天に唾（つば）する」という言葉があります。天に向って唾を吐けば唾は自分の顔に降りかかります。「悪事身に返る」ともいい、自分の犯した悪事はめぐりめぐって自分に返り、やがて自分を苦しめることにもなります。

自分への非難や悪口を聴くと、心中は穏やかではありません。心に傷となって残ってしまうこともあります。しかし、私たちには、言葉も態度も「受け取らない」「聞き流す」という選択肢があります。

真面目なひとは、何でも受け取らなければならないと思い込んでいますが、吐いた毒は、誰も受け取らなければ、悪口を吐いた本人が自分で持って帰るしかありません。時にはニコニコ笑って「受け取らない」という心も必要ですね。

校長コラム

「置かれた場所で咲きなさい」

この本の作者本の作者、渡辺和子さんはキリスト教カトリック修道女の方で5年前に亡くなられました。

「置かれた場に不平不満を持ち他人の出方で幸せになったり不幸せになったりしてはもったいない。どんな所に置かれても環境に負けずしなやかに心穏やかに生きる努力が大切」と強調しています。また**「雨風が強い日、日照りで咲けない日は無理に咲かず、その代わり根を下へ下へと降ろして張るのです」**とも言っています。

新学期が始まり1か月、多少疲れが出てきているところだと思います。大人だって同じです。疲れているときは背伸びせず、しっかり根を張りましょう。そして生活のペースをつかみ、疲れが取れてきたときに大きくジャンプできる準備をしておきましょう。